



玉であそぶ おもちゃ

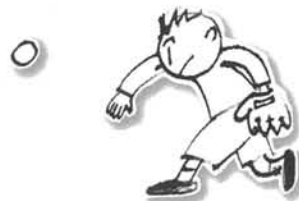
伊藤祐子 ◆ 首都大学東京

今回は「玉」のおもちゃについて取り上げたいと思います。玉といいますが、パチンコ玉のような小さなものから、ボールあそびで使うボールのような大きさのものまで幅広い種類がありますが、今回は、子どもの片手の掌に収まる大きさからより小さい玉を使ったおもちゃについて、お話ししたいと思います。

玉は、球体であるため、ころころ転がる性質があります。平らな面に置いても転がりやすいですが、傾斜があるとさらに転がりやすくなり、傾斜の程度によってスピードが変わるという特徴があります。また、玉の素材や玉を置く場所によってもその転がり方が変わります。つるつるした玉は転がりやすく、表面にでこぼこのあるような素材の玉はゆっくり転がります。また、ふかふかした柔らかい素材の上では、大きく傾けないと転が

りませんが、ガラスやプラスチックなどつるつるした素材の上では、とても転がりやすく、ほんのわずかな傾斜でもすばやく転がります。このような、玉がころころ転がる性質が、おもちゃに組み込まれることによって、玉の動きにいろいろなバリエーションが生まれます。玉の動きに子どもが興味を抱き、注意深く見て（注視）、その動きを目で追いかける（追視）ところに、玉を使ったおもちゃの特徴があると思います。

もう一つの特徴は、玉の形と大きさです。玉は球体ですが、その大きさによって、把持する際の手の使い方が異なります。私が玉のおもちゃですぐに思い浮かぶおもちゃの一つに、くるくるチャイム（くもん出版）があります。このおもちゃで使用される玉は、直径が四・五センチです。このくらいのサイズですと、乳



幼児期の子どもの片手一杯に玉が納まる形で、掌と手指全体を使った握りのパターンを使うことになります。このような手の使い方は、球握りあるいは、親指を他の指と向き合うように対立させて物を持つ把握の形で、精密把握系の包囲軽屈曲把握に分類される形です。このように、親指と他の指を向き合わせて使うことは、手のアーチの形成も促し、子どもの手が、力を入れて握るだけでなく、いろいろな目的に合わせてうまく使えるように育つためにとっても大切な経験です。もう一つよく使うおもちゃの一つで、「シロフオン付玉の塔（クーゲルバーン）」があります。こちらは、玉の大きさが小さく、直径一・二センチ程です。このくらいのサイズですと、掌全体を使う握りではなく、親指と人差し指（中指が参加することも）の指先を使った「つまみ」が必要です。クーゲルバーンの玉は、手づくりで、一つ一つ微妙に形が違います。そして、素材もセメントでできているため、表面の感触は少しでこぼこがあり、つまみを練習し始めた時期の子どもたちにも滑りにくくつまみやすい玉です。このように、おもちゃで使われている玉の形や大きさが、子どもの手の把握やつまみの形の発達とも密接に関係しています。

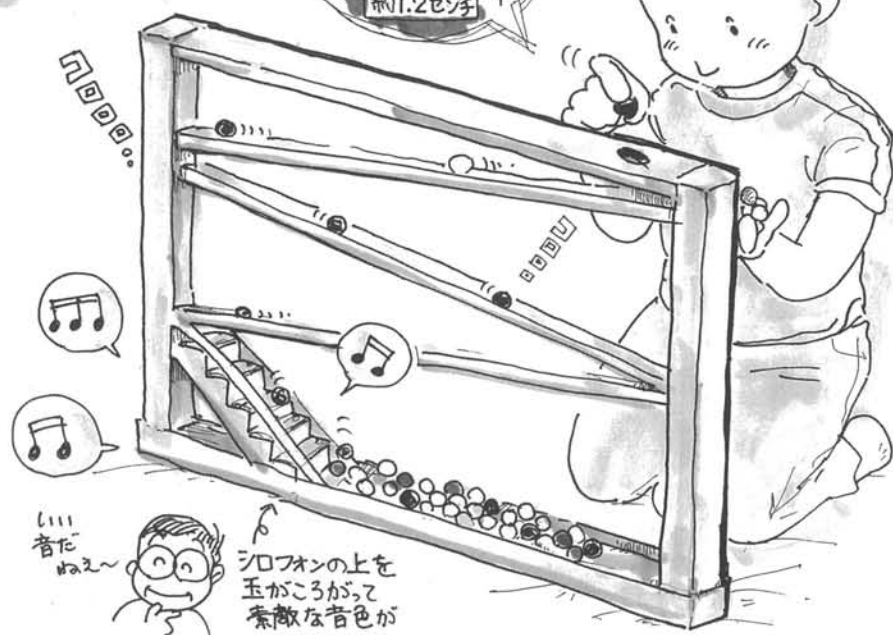
そして、今回紹介した二つのおもちゃ



に共通するあそび方は、玉を目的の穴に入れる。という作業があることです。この作業には、目と手の協調性を必要としますので、あそびの中で、繰り返し練習する機会にもなっているのです。玉が穴に入ると、傾斜のついたレールに乗り、重力に従って転がり落ちていきます。くるくるチャムの方は、レールがらせん形なので、玉はぐるぐるらせんを描いて落ちていきます。中心の筒の周りにレールがあるために、ボールが一瞬正面から見えなくなるのも、子どもにとってはワクワクするポイントかもしれません。一番下のゴールに到達すると、チリンとかわいらしいベルの音が鳴る仕組みで、この音がまた子どもの注意を促します。玉は五つほどあるので、あそびが深まってくると、複数の玉を連続して穴に入れて、玉の転がるスピードの変化を楽しんだり、立て続けに玉を落として音を連続して鳴らしてみたりと、あそびのアレンジもできます。クーゲルバーンは、同じように穴に落としますが、玉の大きさに合わせて、小さな穴ですので、見たところに正確に手を持っていき、つまんだ玉をタイミングよく離すという、より細かいコントロールを伴う目と手の協調性が必要になります。レールは木製の傾斜のついた直線で、末端に穴が開いていて、そこか



シロフォン付き「玉の落とし」
クーゲルラン



いい音だね〜



シロフォンの上を
玉がころがって
素敵な音色が

ら下の段のレールに落ち、転がる方向が変わります。四〇センチほどの幅を玉が行き来するので、子どもの目は、右から左へ、左から右へと追視します。こちらも、最後に音階のシロフォンが付いている、玉がその上を転がると、ソ、ファ、ミ、レ、ドと美しい音色を奏でます。玉の形がふぞろいなので、一つ一つ微妙に転がり方や音色が異なるのも、興味が持続しやすい要因ではないかと思えます。とてもシンプルなおもちゃですが、「穴に入れる↓転がるのを見る↓音が出る」の繰り返しは、因果関係や、ものの性質の理解にもつながると考えられます。そして、大人も思わず楽しくなる要素がありますので、子どもと一緒にあそぶと、そこで「赤いボールだね」「ゆっくり動くな」「上手に穴に入れられたね」「いい音だね」など、多くのコミュニケーションも生まれるでしょう。また、子どもがあまり興味を示していなくても、大人が楽しそうにあそんでいる姿に誘惑されて「やってみようかな?」と思うこともありますので、ぜひお試しください。

1) 鎌倉短子「手のかたち手のうき」 医歯薬出版社（一九八九年）